

提題論の軌跡

—— 松下から佐治までを中心に ——

丹 保 健 一

〈要 旨〉

係助詞「は」の提題機能に関する研究は、松下、佐久間、三尾、三上、佐治等によって、かなり明らかになってきている。本稿は、先学の研究を追うなかで、何が明らかにされ、残されている問題は何かを示そうとしたものである。

〔はじめに〕

ハ（以下、係助詞「は」をハと表すことにする。）の提題性は、I. ロドリゲス（『Arte da Lingoa de lapam』1604～1608）、富士谷成章（『あゆひ抄』1778）等によって既に指摘されている。しかし、その本格的な考察は、松下大三郎を待たねばならなかった。松下の研究は、その後、佐久間鼎、三尾砂、三上章、佐治圭三、等によって受け継がれ、今日に至っている。しかし、受け継いでいると言いつつも、題目の捉え方そのものに違いが見られ、又、ハの題目提示機能についての考え方にも相違が見られる。なお、今回取りあげなかった、最近の研究についてはいずれ稿を改めて述べるつもりである。

問題が少しく込み入っており、又、従来の研究を正しく理解する必要からも、直接引用を出来る限り多くしたいと思う。（引用文は総て新字体、新仮名遣いに改めた。）

〔1〕 これまでの研究

松下以前のものを少しく挙げておこう。

『ロドリゲス日本大文典』（土井忠夫訳）には、

主格の Va（は）は指示又は提示するものであって、我々が、quanto a foão（これこれの人に就いては）等いう場合と同じように、一種の力を持っている。8p

この格辞が主格に立つ場合は、非常な勢と力を持っている。それは実例によってのみ会得できる場所のものである。一中略—これは指示したり提示したりする助辞であって、何々に関してはという意を持っている。例えば、Varevare cotoua（我々事は）は私に関してはの意。501p

この V a は（は）は、概して言えば、その接する語を指示し、注意し、明記し、列挙するという心持を表す。533p

とあり、又、『あゆひ抄』（『富士谷成章全集』所収）には、

〔何は〕 一中略一物を引（き）分けてことわる心なり。さる故に物を問う詞ともなれり。一中略一〇凡「は」は一歌の旨として。題を受くべき脚結也。古今に。もみじ葉は袖にこき入（れ）て持ち出（で）なむ秋は限と見ん人のため。此歌もみじ葉と言わば。目の前に紅葉なかるべし「は」文字は。すべて其物を正面に取り出して言う詞なり。718～720 p

とあるように、ハが持つ提題性の指摘を見ることができる。

この他、ブラウン、ホフマン、チェンバレン、インブリ、草野、山田等、とりわけ山田の研究についても触れるべきであろうが、本稿は、ハをめぐる提題論の成果を明らかにすることを当面の目的としている。そのことからすれば、割愛は許されるであろう。なお、これらの人々の提題論については、松村（1970）、尾上（1977）において触れられている。

ハの提題機能を、文の判断作用とのかかわりで本格的に捉えようとしたのは、松下によって始まったといってもそれほど大きな誤りと言えないだろう。本稿では、そのような提題論研究の流れの中にある主要なものとして、松下、佐久間、三尾、三上、佐治を取り上げることになりたい。佐治の研究は最も重視すべきものを含んでいるように思われる。引用はおのずと多くなろう。（なお、引用及び参照箇所として示した文献ページ数のあとに「より」とあるのは、その文献のそのページから要点を抜き出したことを示し、ないものはそのままの引用であることを示す。）

1.1 松下の考え方

松下の考え方を、『改選標準日本文法』及び『増補校訂標準日本口語法』によって、見ていこう。

松下は、題目語を次のように規定する。

題目語は提示的修用語の一種であって思惟作用における判定の対象を提示するものである。思惟とは判断を下すことである。観念と観念との一致不一致を判定することもある。『改選標準日本文法』（以下、『改選』と略称する。）712 p

そして、題目語は、提示語の一種であるとし、他の係助詞や副助詞の接続した語から区別して次のように述べている。

提示語の中には、一、題目語、二、特定語、三、係語、この三種、及びこれらの混合したものが有る。簡単に言えば「は」「も」の付いたのが題目語、「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」「な」の付いたのが係語、「のみ」「すら」「だに」「さえ」などが付いたのが特定語である。『改選』713 p

このレベルでは、ハ、モ（以下、係助詞「も」をモと表す）を同格に扱っていることに留意したい。ただ、意味的なレベルにおいては、次のように分類している。

あの人^ハは幹事です。・・・分説

あの人^ハも幹事です。・・・合説

あの人^ハ、幹事です。・・・単説

『改選』713 p

例文中、傍線が「、」まで掛っていないのは、気になるところであるが、誤植であろうか。

又、次のような語も題目語を提示するとしている。

「一ば」・・・・・・分説 花咲かば 花咲けば
 「一とも」「一ども」・・分説 花咲くとも 花咲けども
 「一と」「一ど」・・・・分説 花咲くと 花咲けど

『改選』714 p

ハ又は「ば」による題目語としてどのようなものかを考えていたかは、題目語と主語、客語等との別を説いている箇所に見ることが出来る。

主体の題目語	<u>花は咲く</u>
客体の題目語	<u>花をば見る</u> 花は見る
	<u>都には上る</u>
	<u>人とは交わる</u>
	<u>家よりは出づ</u>
	<u>雪よりは白し</u>
	<u>長くはなる</u>
	<u>静かにはす</u>
実質の題目語	<u>絶えはせぬ嘆き</u>
	<u>真理を探究はせず</u>
属性の題目語	<u>二たびは来らず</u>
	<u>行きては見ず</u>

『改選』715 p

上に挙げた四種の題目語の外、判断自身を提示するものがあるとして、次のような例を示している。(ハの題目語のみを挙げておく。)

立派だことは立派だが高いことは高い。

一中略一

貴方は台湾だそうです、台湾はどちらですか。

『改選』716 p

氏は、複層的題目語についても指摘している。

題目語と統率語とより成った連詞へ更に題目語を附けることがある。



の——は題目語であるが、「象」は大題目で、「鼻」と「目」は小題目である。「象」は全断句の題目で「鼻は」と「目」は一部の分だけの題目である。こういうのは三つ以上重なることもあるから上から算えて第一題目、第二題目という様に名付ける。

一中略一

一	二	三	四	五	五
<u>私ハ</u>	<u>昨年ハ</u>	<u>夏ハ</u>	<u>遠い所ハ</u>	<u>汽車でハ</u>	<u>日光へ行き、船でハ大島へ行き、</u>

四 遠い所ハ玉川房州などへ行ったが、冬ハ 三 何処へモ行かなかった。
四 こんな風に小題目が沢山有することもある。

『改選』 778～779 p

以上見てきたように松下の言う題目語は多岐に渡っている。

次のような、注目すべき指摘も行っている。

大題目又は単層題目は必ず断句全体の題目であるとは限らない。

「今日」貴方ハ何処へいらっしゃいますか。

「こういう訳で」私ハあの人とは交際が絶えました。

の「今日」「こういう訳で」は題目関係の圏外にあって題目の勢力を受けて居ない。しかし倒置法で題目が下に在る場合はこれと違う。

何という御料簡ですか、貴方ハまあ。

の「貴方」などは全断句の題目である。

『改選』 779 p

「まあ」の傍線は誤植であろうと思われる。

松下の題目の考え方、ハについての考え方は、断句（文）の分類にも伺うことが出来る。

松下は、断句（文）を断定の性質によって思惟断句と直観断句に分けている。そして、思惟断句に有題、無題の直観断句に概念的、主観的の別を設け、次のように示している。

今宵は十五夜なり。・・・・・・有題的	} 思惟断句
花咲きたり。・・・・・・無題的	
君よ！・・・・・・概念的	} 直観断句
否！・・・・・・主観的	

この分類は断定の分類と一致する。

『改選』 16～17 p

有題断句と無題断句の別については次のように説明している。

有題断句とは判断の対象の概念を提示してこれを判定して断定を表すもので、無題断句とは判断の対象の概念を提示せずに判定した断定を表すものである。故に有題断句には必ず題目語が有る。一中略—しかし題目がその断句の代表部へ関係せずに従属部へのみ関係するならば、其は断句の材料の一部が有題であるだけであるから有題断句とは言えない。

国語は出来るが漢文は出来ない学生が沢山居る。

のようなのは有題断句ではない。

『改選』 728 p

連体修飾節又は従属句節のハと主文中のハとでは性格が異なることを示したものである。

有題か無題かの基準と考えている「断定」についてやや詳しく述べている箇所を挙げておこう。

断定は事柄に対する主観の観念的了解である。

『改選』 12 p

断定はその了解のされ方によって思惟断定と直観断定との二つに分かれる。

思惟断定とは判断の作用による了解である。事柄に対する観念が他の観念と比較されてその間に共通点が発見され、前者の観念が判断の対象となり後者の観念が判断の材料となり、両者が同一意識内に統覚されたものである。一中略—こういう断定は判断の作用によって生じたもので即ち思惟的断定である。

右の様な思惟断定は判断の対象も概念であって題目となっているからこれを有題の思惟断定とする。所が判断の材料だけが概念となっていて判断の対象が概念とならずに写像のままではある場合がある。例えば「天気」を見て「雨が降りそうだなあ」と思ったとすると、これはその場合の「天気」を対象として判断を下したのであるが、その対象は概念となっていない。こういうのを無題の思惟性断定とする。直観性断句とは断定の作用に依らず即ち事柄に対する観念が判断の対象と材料とに分解されずにそのまま了解された断定である。『改選』12～14 p

三尾のいう「現象文」にはほぼ相当するのが松下の言う無題断句である。佐久間のいう「ものがたり文」とは性格を異にする。

松下が題目語をどのようなものと見ていたのか一端を知るものに「題目は旧概念である」がある。そのことに言及している箇所を見ておくことにしたい。

題目は即ち問題である。判定の対象の予告的提示である。予定であるから解説に先だって先ず定められる。そうして解説を要求する。先ず求められるから旧概念となる。旧概念となるから倒置法でない限り判定語より先にいわれる。一中略一平説態にも概念の新旧があることは勿論だ。一中略一未定、可変、自由なものは絶対に題目にならない。『改選』772～774 p

この、「未定、可変、自由なものは絶対に題目にならない」は後に佐久間によって批判されることになる。

松下は、「論理的主語と文法的主語とは違う」ということで次のようにのべている箇所がある。

題目と判定語との関係は全く主観的の関係である。一中略一 論理上の題目は必ずしも事象の主体たるを要しない。『改選』780～781 p

又、『標準日本文法』（『増補校訂標準日本口語法』（以下『増補』と略称する）所収）には興味深い単流断句の分類が見られる。ただこの分類は『改選』には見られない。

		(無色断句)	(感動断句)
断句	記述断句	表明断句・・・・雪降る	雪降るよ
		疑問断句 { 一般疑問・・・雪降るか	雪降るかや
		反転・・・雪降るべしや	雪降るべしやは
	命令断句・・・・	雪降れ	雪降れかし

『増補』472 p

この分類は意識が単一に流れている文（単文）についてのものであるが、命令、疑問、感動と言った表現が必ずしも有題断句に専有のものではないとの見解を読み取ることが出来る。後に述べる佐治の考え方と相入れないものが見られる。

モトハの別については、次のように述べるに止まっている。

分説題目態は一中略一事情の異なる他物と相分かって之を提示し、合説題目態は一中略一は事情の類する他物と相合わせてこれを提示する。『改選』600 p

分説は事情の異なるものを分けて云い、合説は事情の同じものを合わせて言い、単説は分合せずという。

『改選』713 p

1.2 佐久間の考え方

佐久間は、松下の考え方を受け継ぎ、ゲシュタルト心理学、直接的にはビューラーの影響下、場の理論によって発展させている。まず、『現代日本語法の研究』によって見ていこう。

佐久間は、「ある一事を述べるに当たって」、「叙述の範囲をおおまかながら決める必要がある」とし、その範囲を設定してそれを提出する作用を「話題の設定」と呼んでいる。更に、このように設定された範囲は、個々の叙述や判断を誘導する「場・話題の場」を作るとしている。そして、「概念的な内容の議案の説明、事理の解明という抽象的な取扱になると」、「その事理の通用する限界（妥当範囲）を明らかにする題目の提出が要求され」とし、次のように述べている。

題目の提出によって一定の「課題の場」が設定されることになります。そこに課題の提出によって生じた場の緊張状態は、適切な解答としての説明をまわってはじめて平衡を保て解消します。」

（「十三 提題の助詞「は」と「も」」）

『現代日本語法の研究』201～202 p

心理学的な考え方がよく出ている考察のように思われる。ハの働きの解明には多くの視点を必要とすると思われるが、心理学的な視点からの分析を特に必要とすることが多いように思われる。その意味でも今後の研究に多くの示唆を与えるものと言えよう。なお、最近、心理的側面から言語による表現・理解構造に迫ろうとする研究が機械言語学・コンピューター言語学において行われていると云う。（R. C. SCHANK 『考えるコンピュータ』）

又、氏は、松下氏の説明原理についてもいくつかの疑問を投げ掛けている。ガはすべて未定、可変、自由な観念を受け、ハはすべて、既定、不可変、不自由な観念を受けるのか、題目語の平説語との区別が、判断の形式を供えている場合だけに適用されるのか、がそれである。

前者にたいしては、「江戸者でなけりゃお玉が痛がらず。」「役人の子はにぎにぎをよく覚え。」を例として、「お玉」が未定・可変・自由と言えないのではないか。又、「役人の子」が既定・不可変・不自由というのは適当でないとしている。

後者にたいしては、「事象の叙述と思案の判定とが、おのずから別種の表現形式をもつことに留意したい」とし、ハは「典型的に判断の表現に関係するし」、ガは「だいたい事実の報道に関与する」、とした方がよいとし、措定語や形容詞・形容動詞以外においても題目表示のハの叙述語足ることを指摘している。（『現代日本語法の研究』204～206 p より）

上記のことに関連して、判断の表現についての次のような指摘も注目したい。

前提の「役人の子は」のような場合は、措定の語を伴わない例です。それでも一種の潜在的な判断を表現するものとみることができましょう。つまり「……と言うものは……するものだ。」の様式にはまるものだからです。

私はどうしても出かける。

あなたはどっちにします？

こうした例の表現は、意向などに関していますので、判断とおのずからちがいます。これも「……するつもり（気）だ」のような形に帰するところから、「……が欲しい」のような場合と関連づけて考えることは可能でしょう。

『現代日本語法の研究』224 p

名詞文、形容詞文、動詞文といった種類の形式的側面で判断の質を考えることの問題点を指摘したものである。留意したいものの一つである。

氏の論考には、三尾の現象文、最近の現前描写文・眼前描写文の考え方に相当するものも見ることが出来る。

雪が白い。

という場合には、何事が表現されているかといいますと。この短い文句がすでにある一つの光景を写し出しているのです。というのは。眼前の風物として雪が、雪の景色が展開されていて、それをまのあたりに見ている人が、その有り様を描写して、あるいは報告するという場合が、こういう表現になるのですから。自然にその現前の場というものが裏付けられていますし、また想像されます。

で、それは現前の場から遊離しきっていないところの表現です。いいかえると、

ソラ、ね、雪が白いでしょう！？

という、眼前に展開される場面を、背負っているところの表現なのです。

『現代日本語法の研究』208～209 p

松下にも類似の指摘はあるが、場という考え方を導入している点に注目したい。

直接、助詞「は」の本性について述べている箇所がある。見ておこう。

助詞「は」がどういう関係を示すかという、それは、現前の場を離れた、概念の世界におけるいわゆる「課題の場」を提起する役割をつとめて、その提起した題目について残りなく行きわたることを示すというところに本領をもっと認めるべきです。

『現代日本語法の研究』212～213 p

又、ハに関しての判断に二種あることを「一般と特殊」と言う言葉によって指摘していることも指摘せねばなるまい。

(引用者注「は」が受ける初出語については) 特殊と一般との対立として解いた方がよくはないかと考えます。

雪は白い。

という場合が一般に事物について判断し、定性したもので、ここにすべて通じてそういえるという関係が暗に示されています。これに対して

これは私の鉛筆だ。

という場合は、特定の限定された、現前の場の事物、または関説された既知の事物について、判断し、措定し、叙述するのです。

『現代日本語法の研究』216 p

「指示」に二種（不特定、特定）あることの指摘である。

佐久間は、ビューラーの影響を強く受けて、次のような表を作成している。

言語機能	発言事態	構文種別	“演奏”	特定性語詞
表出	内面状態	感動文	語調	感動詞
	の映発	(一語文も)	速度ナド	
うったえ	対人的はたらきかけ			
	I) よびかけ	(換体)	かたい	感動詞
			声位	
	II) 命令	命令文	ク	動詞命令形

演述	Ⅲ) たのみ・	願望文		
	すすめ			
	Ⅳ) 発問	発問文	尻上りの	問の助詞
			語調	“か”
	α) 肯定・否	質問		
	定を求める			
	β) 未知項Xを	疑問		疑問の語詞
	解く			
	事象の所見	平叙文		
	の伝達	(いいたて文)		
	1) 動作表現	ものがたり文		動詞
	2) 状況表現	しなさだめ文		
	a) 性状表現	性状規定		性状語 (など)
	b) 判断措定	措定		措定語

(「4 構文と文脈」)『日本語の言語理論』61 p

心的状態、構文、述語語詞の特定などが示され、その関連性が見えるようになっている。なお、表中の、ものがたり文、しなさだめ文は、三上も指摘しているように、三尾の現象文、判断文とは別物である。

1.3 三尾の考え方

三尾は佐久間の影響下、「場」を次のように規定し、文を場との関連で分類している。

あるしゅんかんにおいて、言語行動においてなんらかの影響を与える条件の総体を、そのしゅんかんの話の場という。『国語法文章論』27 p

あるしゅんかんにおいて、文になんらかの影響を与える条件の総体を、そのしゅんかんの文の場という。『国語法文章論』48 p

三尾の、場の関係からの文の分類は、提題論を考える上でも重要である。まず、『国語法文章論』によって概略を示しておくことから始めよう。

文の類型 その一 58～64 p

- (一) 場の文 [例] 雨が降っている。
- (二) 場を含む文 [例] それは梅だ。
- (三) 場を指向する文 [例] あ! 雨だ!
- (四) 場を相補う文 [例] 考えているのだ。 犬もだよ。

58～59 p より

(二) 場を含む文 64～70 p

課題の場の文と転位の文の二つがある。

(a) 課題の場の文 65～68 p

課題+解説の形をとるもの。

(b) 転位の文 68～70 p

「課題は解説だ。」の形を「解説が課題のだ。」の形になおしたもの。 69 p

文の類型 その二 76 p～

- (一) 場の文・・・・・・・・現象文
- (二) 場を含む文・・・・・・・・判断文
- (三) 場を指向する文・・・・未展開文
- (四) 場を相補う文・・・・分節文 81～82 p

(一) 現象文 82～83 p

体言＋が＋動詞の形の文である。動詞も終止形は少なく、「～ている」「～でいる」「～てる」「～でる」か「～だ」「～た」が多い。 82 p より

現象文は現象をありのまま、そのままをうつしたものである。判断の加工をほどこさないで、感官を通じて心にうつったままをそのまま表現した文である。 83 p

(二) 判断文 89～101 p

論理学でいう命題、すなわち「AはB」の文である。89 p

体言＋は＋体言だ。の形をとるものが判断文の典型的なものである。判断文にあっては、主部、述部は題目－解説の構造をとる。 90～91 p より

なお、典型的な判断文のほかに、次のような特殊の判断文が考えられる。

(a) 対比の判断文 93～96 p

これは、同じグループに属する二つ、三つ又はいくつかの課題が対比のために持ち出されて、同時に二つが成立している連立の判断式である。95 p

単一の判断文では、解決はBにあらざるものという無数の数を背後にひめているのであって、その無数の解決からBがただ一つえられたというのであるから、右の対比の場合はこれとは区別されなければならないのである。 95 p

(b) 仮定題目の判断文 96～97 p

- ・・・・たら・・・・だ。
- ・・・・ときたら・・・・だ。
- ・・・・といえは・・・・だ。 96～97 p より

(c) 転位文（転位の判断文） 98～101 p

(三) 未展開文 101～104 p

内容が十分に文の上に展開していないもので、未展開のままで、場を志向する文。102 p より

(四) 分節文 105～108 p

不完全文とか省略文とか呼ばれてきたもの。けれども、実際その場においてそれで十全に文である。ただ言葉の上の表現だけを場から切りはなして見たときに、それが不完全に見えるのである。

105 p

以上によって三尾の分類型を概ね示されたと思われる。以下、題目をどのようなものとして捉えているかに焦点を当てて見ておこう。

判断文にあっては、主部は題目であって、格の概念からはなれたものである。－中略－「題目－解説」の構造をなすものである。－中略－題目は解決を要求する課題である。解説は課題にたいする解決である。 91 p

表現の上の事態が事実（対象）と一致すればそこにこの表現は正しいという主張が生まれる訳である。判断における断定作用は、この事態を断定し、主張するものである。 93 p

現象文について説明している部分に次のような箇所がある。

現象文はこのように、助詞「が」を持ち、述部が動詞で時間的制限のもとに成り立っているものであり。

現象をそのまま表現したものであるが、これについて一つの反対論がある。

雨が降ってる。

は、

それは雨が降ってるのだ。

という判断文に他ならないという説である。—中略—しかし、日本語の表現で単に「雨が降ってる」というのと、「雨が降ってるのだ」というのでは根本的にちがっていることを、ちょっとでも注意すればわかることだろうと思う。—中略—

電車がきた。

犬が走ってる。

お父さんが帰ってきた。

火事だ。

自動車だ。

などもみなそうである。 84~87 p

三上のいう略題文、佐治のいう状況陰題文に係わってくる部分である。

又、未展開文として説明している箇所にも注目すべき指摘が見られる。

火事だ！

は

火事が起こっている！

のようになる。「火事だ！」

というふうに判断文と見ることは、意識の真相からはるかにはなれた、単なる外附的な分析的説明にすぎない。サイレンの音をきいて、「あれは何だろう？」という課題の場で、「火事だ？」という場合は

あれは火事だ。

と言う判断文の分節であって。四の分節文にぞくし、これは別物である。—中略—「火事だ！」の「だ」は、思いがけない存在や生起を驚きを以て叫ぶ「だ」である。

火事だ！

は

火事が起こっている！

—中略—

である。すなわち助詞「は」と共にある判断の「だ」でなくて、助詞「が」と共にある現象の「だ」だとよぶべきものである。—中略—未展開文の心的作用の根拠を見ると、中には「はい。」のように判断作用にもとづくものもあるが、大部分は驚異欲求禁忌といった情意作用の表現だといえる。103~105 p

ここには、「名詞＋だ」の形式を持つ文が判断文でない場合もあることの指摘が見られ、三尾の判断、題目にたいする考え方を知ることができる。又、三尾が、心的作用をこれまでの直観、判断の二分類から、直観、判断、情意の三分類にした方が良いと考えていたことをも伺うことができよう。このことも留意しておきたいことの一つである。

文の力学的構造と言うことで「は」について言及している箇所がある。挙げておこう。

例をあげて文の力学的構造のあらましを説明しよう。

私は

といえば、「何だ」「どうしたんだ」という解答が与えられて文がむすびになるまで続いて行くところの頑

強な「力」をもっているのである（対比の場合は別として）。 182 p

対比の場合が別であることは、これまでも指摘が見られるところである。

1.4 三上の考え方

松下、佐久間、三尾を受け継ぎながらも、様々な新しい指摘や提案をしているのが三上である。発表順に見ていくことにしたい。

処女試論「語法研究の試論」（『現代語法序説』所収）を見ると、次のような指摘がある。

雪が白イとか若葉が美シイとか言えば風景を全身的に感じている表現になる。 『現代語法序説』 402 p

この箇所は、ハとガとの別について述べている部分であるが、それは又、判断の質、題目（主題）についての議論にも繋がってくる指摘でもある。

同論考では、連体との関連でハを二種に分け、単説（主題）・全体提示と分説・部分提示と名付けている。

ハ	特設	単説（主題）	全体提示・・・連体には使えない	『現代語法序説』 404 p
		分説	部分提示・・・連体にも使える	
モ	共説（追加、併合）		部分提示・・・連体にも使える	
ガなど	平説		提示しない・・・連体にも使える	

「ハ」でも部分提示なら連体にできる。算術ハ出来ル生徒デスと言っても耳障りではない。

『現代語法序説』 407 p

ハを二種に分けることはこれまでも見られるが、単説（主題）・全体提示と分説・部分提示と命名しての指摘は初めてであろう。

命名と整理ということで指摘しなくてはならないものに、題を三種に分け、各々、顕題、陰題、無題としたことがある。もっとも、三上自身触れているように、無題は松下に無題的叙述として見られるものである。なお、略題という命名は、三尾の分節文に相当するものであるとして「基本文型論」（『三上章論文集』所収）に既に見られる。

－扁理ハドウシタ？

－扁理ハ到着シマシタ（顕題）

－扁理ガ到着シタ

－扁理ガ到着シタンデス（陰題）

－何カにゅうすハナイカ？

－扁理ガ到着シマシタ（無題）

問と答に共通な成分が主題である。顕題では「扁理」が主題であり、陰題では「到着」が主題である。無題の問答には共通成分がない。陰題と無題との違いは、陰題は語順をひっくり返して 到着シタノハ扁理デス という顕題のセンテンスに直すことができるが、無題はひっくり返すことができない。これは主題を欠いて、全文が解説なのである。顕題は主題提示の助詞「ハ」の有無による。

（「主格、主題、主語」『現代語法序説』 81～82 p）

「基本文型論」には、「主題・題目」及びそれを対象とする「判断」について考える際に参考

になると思われる指摘が見られる。

具体的なセンテンスは、コト+話手+相手+場面として成り立つ。

彼ハ帰ッタカシラ？

アノヒト、帰ッタカシラ？

アノヒトハ帰ラレマシタカ？

これから場面（伝達条件）の違いを消去すると、一般的な疑問文になる、右のうちの一つで代表させておくより書き表しようがないが、

彼ハ帰ッタ？

という疑問文である。

平叙文・命令文などとともに、コト+話手+相手一般の上に成り立つものである。

次に相手を遮断すると、

Xハ帰ッタカ 「ハ」のある有題

Xが帰ッタカ 「ハ」のない無題

という対立の考えられる段階になる、有題無題は、コト+話手という段階に立つ区別であって、話手が単語Xを特に取り立てるか否かによって分かれる。

『三上章論文集』228 p

ここからは、平叙文、疑問文、命令文等有題文としてどのように扱われるべきかの考え方を読み取ることが出来るように思われるのである。

又、同論文には、感嘆文にたいする次のような指摘も見られる。

感嘆文はコト以外を表す。コト以外は、コト以前とコト以後とに二分される。ア！オヤ！ー中略ーなどはもちろんコト以前であるが、コト以後で代表的なものはモノ（名詞）である。

オ母サン！

ー中略ー

ヨク気ノツイタコトダコト！

などにも名詞や連体法が見られる。

ー中略ー

痛！

ー中略ー

コト以後の感嘆文というのは終止法によるセンテンス（の格好のもの）が、叫びの気分になで高潮したものをさす。

ヤレヤレ、助カッタ！ （断言）

一ツ、ほえんと行ッタロウ！ （推量）

ダレガ行ッテヤルモンカ！ （疑問）

降ルナラ、降リャガレ！ （命令）

ー中略ー

平叙文であり、おまけに感嘆文であるという言う方も許されよう。感嘆文というものを、そのような特殊な位置を占めるものと見なしておけばすむことだから。

『三上章論文集』247 p

なお、感嘆文の特殊性については松下にもほぼ同様の考え方を読み取ることが出来る。

直接に、題目とは何か、又その働きは何かについて述べている箇所がある。見ておこう。

題目の提示「Xハ」はだいたい「Xニツイテ言エバ」の心持ちです。上の「Xニツイテ」は中身の予告で

す。下の「言エバ」は、話し手の態度の宣言であり、これが述語の言い切り（文末）と呼応します。

後者、すなわち文末と呼応して一文を完成する仕事は「ハ」の本務です。中味への関与の仕方は「ハ」の兼務です。

（「第一章「ハ」の兼務」『象は鼻が長い』8 p

「Xハ」は題目の提示ですが、提示はもちろん相手に向かってです。

（「第二章「ハ」の本務」『象は鼻が長い』140 p

ハは、「について言えば」である、に類する指摘は、これまでも見られるものであるが、捉え方に微妙な相違がある。特に、本務と兼務に分けた点にそれが出ている。ただ、この本務と兼務については、後に佐治によって批判される部分でもある。

題目の質的なものについての見解をも伺うことが出来る。

本書では、もっぱら「Xハ」を扱っています。次いで、位置を表す「Xニハ」「Xデハ」をそれに準ずる題目としてちょいちょい引き合いに出す程度です。

その他のXトハ、Xヘハ、Xカラハ、Xデハ、Xニツイテハ、Xニ関シテハなどは扱いません。これらは狭い題目と言うべきものであり、「ハ」は兼務を解かれて、本務一点張りになります。一中略一形容詞の連用形や副詞に「ハ」のついたものも取りのけです。これは定義の問題ですが、題目というのは、名詞＋「ハ」と名詞＋格助詞＋「ハ」に限りたいと思います。一中略一題目と呼ぶことが適当であろうとなかろうと、その単語を提示していることだけは、全部に共通です。それが助詞「ハ」の本領ですから。

（「第一章「ハ」の兼務」『象は鼻が長い』87～90 p

又、題目を提示する言語形式の様々についてその別をも述べている。「ハ」の独自性をどのように考えていたかが分かう。

Xナラー相手から話し手に移りつつある題目、条件付きの題目

Xハーすっかり話し手のものになっている題目、無条件の題目

（「第三章「ハ」の周辺」『象は鼻が長い』165 p

単純な提題 彼ハ来タ。

追加の提題 彼モ来タ。

（「第三章「ハ」の周辺」『象は鼻が長い』166 p

	題目	半題目
単純	ハ	ナラ
追加	モ	デモ

（「第一章「ハ」の周辺」『象は鼻が長い』168 p

「なら」「でも」は半題目としてるもの、「も」とハの別については追加と単純とするに止まっている。（ちなみに、寺村は、「も」には次発・受け・承り型、ハには談話初発・仕掛け型といった名称を与え、更にこのような考え方を発展させようとしているようである。1988年度、現代日本語学講義による。）

同書には、次のような注目したい指摘も見られる。

問投的題目に、二つの場合が考えられます。一つは名詞が強く限定された場合、今一つは、反対にその輪

郭がはやかされた場合です。

(「第三章「ハ」の周辺」)『象は鼻が長い』175 p

松下の言う複層題目についてはつぎのように述べている。

一つの文に“ハ”が2回、ときには3回も出ることがある。第1の“ハ”は主題らしい主題で、その勢力は文末に及び、さらにピリオドを越えようとする。第2の“ハ”はいわば副題(sub-topic)で、その勢力も弱く、対比、逆接、否定を表すことが多い。

(「4 topic-comment」)『文法小論集』63 p

「Xハ」がピリオド(マル、句点)を越えて次々の文まで及んでいく例は珍しくありません。」

(「第二章「ハ」の本務」)『象は鼻が長い』117 p

ハが文末まで係ることと、ピリオドを越えていくこととは別のレベルのものとして扱うのが良いのではないかと思われる。

「断定」については次のように喝破している。

それでは断定とはなにかという問題が起こるかも知れないが、抽象難解な哲学論を勉強させられるのはごめんである。「広辞苑」の定義ぐらいでけっこう間に合う。

③〔論〕(judgment) 概念と並ぶ思考の根本形式。幾つかの概念または表象の間の関係を肯定したり、否定したりする作用で、「AハBである」「AハBでない」という形式をとる。

(「12文法用語のこと」)『文法小論集』188 p

判断とは何かを詮索する前に、言語現象を先ず見るべきことを示唆しているように思われる。逆であってはならない。

三上は他にも様々な指摘、見解を示しているが、本稿の目的からすれば上に挙げたもので十分であろう。

1.5 佐治の考え方

佐治は、松下、佐久間、三尾、三上、森重等の影響を受けつつ、題目・提示を表すと言われている「ハ」、「モ」、「ゾ」、ナム、ヤ、カ」、そして副助詞の別を係りの深さという観点から分析している。又、漠然と言われてきた「判断」についても鋭い指摘を見ることが出来る。文の類型として、有題文の一種として状況陰題文を立てたことも、様々な問題があるにせよ特筆するに値しよう。

主題・題目をどのように考えているか、又、それに関連して、有題、無題の別を何を根拠として考えているのか、判断についてはどうか、を中心に見ていくことにしよう。

氏は、主題とは、「構文上、それについて解説・説明(叙述)されるべき題目として提示された成分」で、「叙述と対立し、統一されて題述文を作る。」と定義づけている。なお、題述文に対立する存現文は、「事物・現象の存在を表す」文で主題が無く「叙述部だけからなる文」であるとしている。(「題述文と在現文」111~112 p より、頁数は所収雑誌の頁である。以下同じ)

なお、存現文については、同論考中に「判断ではなく、客観的な事実として言いたてられているのである。」と説明している箇所がある。

ハの限定・特示の機能についての指摘から、見ていこう。

このように「は」は、文中の連用成分を限定、特示する機能を持っている点で、広くは副助詞の中に入れられるのであるが、違う性質も持つ。 「題述文と存現文」 114 p より

又、氏は、名詞文、形容詞文、動詞文における、主題の有無及び判断の内容についても言及している。

名詞文は、顕題・陰題の区別はあってもすべて題述文だと言えよう。けれども名詞文のすべてが包摂判断（その一種としての「一致判断」を含めて）を表すのではない。⑬（引用者注「この家は窓が南向きだ。」を指す。）などは形容詞文の表す判断に類する判断を表しており、代用陳述をなす。

⑭ ぼくはうなぎどんぶりだ。

なども包摂判断を表すものではない。

「題述文と存現文」 116 p

形容詞文も題述文である。一中略一主語の中に、その属性、状態（情）の存在を認めるものである。この種の文は、主語の持つ無限の属性・状（情）態の中から、一つを取り出して述べるものである。主語の中に、その属性・状（情）態を認めるものだと言ってもよい。

「題述文と存現文」 116 p

そして、形容詞文については、二つのタイプを挙げそれらの題述文としての特殊性について説明している。

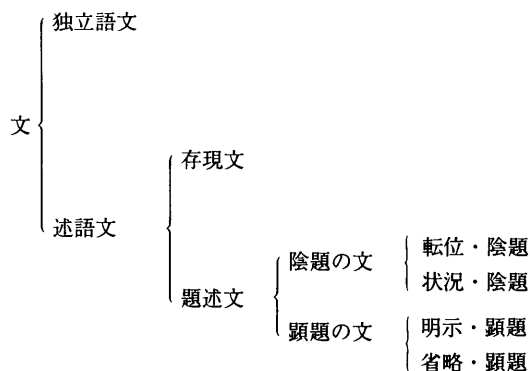
状況陰題文については、「山が美しい」を例文に挙げ、この文は、転位・陰題と状況・陰題の可能性のあることを認めた上で、状況陰題文としての「山が美しい」について次のように述べている。

⑮（山が美しい）は、時間・空間的に限定を受けた場所を基にし、それに有形、無形の要素が加わった「状況」に対して、その中にある属性の一つ「山が美しい」を引き出し判断を表したものだ一中略一。その全体が状況を主題とする叙述であり、その主題が顕れないところの陰題の文であると把握できるのである。

〔状況〕 — 〔山が美しい。〕

「題述文と存現文」 116 p

そして、状況陰題文は次のような位置を占めるとしている。



「係り結びの一側面」 4 p

又、主観的認知を表す形容詞については、次のように述べている。

⑯ 私は水が飲みたい。についても「水が飲みたい」は「私」の属性についての説明をなしているものと

みる。「水が飲みたい」は「水」に「飲みたい」と表現すべき属性があることを話し手が認知した表現で、そう認知したのが話し手の私だというのが「私は水が飲みたい。」という文なのである。

「題述文と存現文」116～117p より

状況陰題文及び主観的認知の形容詞文については、主題を持つと言えるか、つまり、有題文と言えるかは問題となろう。しかし、重要な指摘を含むことは認めたい。

動詞については次のような興味深い指摘がある。その主張は次のように要約できよう。

動詞文の内、「思われる」「見える」「聞こえる」「できる」「認める」「要る」「ある」等も「～は～が～。」の形を取る。これらの文の主題は、その状（情）態の存在の場所を示す。これらの文によって示される状態は、外から直観的に認知することのできないものだから、題述文にならざるを得ない。」

可能動詞の内でも「思う」「わかる」「知る」「感じる」など個者の心的活動を表す動詞についても同様の理由で、題述文にしかない。

「題述文と存現文」117～118p より

そして、「山が見える」はいずれも題述文で、解釈は次の三通りであるとしている。

(私・我々は)	－	山が見える。
(見えるのは)	－	山が見える。
(状況)	－	山が見える。

「題述文と存現文」118p より

外からの直観的認知の可、不可が題述文（有題文）、存現文（無題文）の基準となりうるのか。いささか疑問を感じる。

主題の有無とモダリティ・ムード、文の意味類型との係わりについて述べている箇所がある。挙げて置こう。

㊦ 山がある。は、顕題の省略の文、転位・陰題の文、状況・陰題の文の各々として解しうる。判断の質は「見える」の場合とは異なり、全体者に通じる形で「ある」。つまり、判断ではなく、客観的な事実として言いたてられているのである。

「題述文と存現文」118p

存現文の述語に過去の「た」が付いても事情は変わらない。一中略一確認の「のだ」や推量の表現、一中略一さらに否定、意志、命令、疑問の表現も文も題述文にしてしまうようである。

「題述文と存現文」119p より

存現文は、事物、現象の存在を直観的に把握するものだから、確言の平叙文でしかあり得ないようである。

「題述文と存現文」119p

佐治は、命令、疑問等が有題文であると言っているのであるが、モダリティの各形式と有題文、無題文が一对一の対応関係にあるとは思われないことを指摘しておきたい。

ハによる提示の種々についても明確に示している。

もともと徒でないものに「は」をつけ加えても、それは連用修飾成分の強調、とりたてにしかない。一中略一主題と叙述の結びつきは、論理的格関係による結びつきとはまったく質を異にする、森重教授の説かれる「断続」の関係なのである。

「題述文と存現文」120p

同様のことを、「係り結びの一側面」においてさらに詳しく述べている。

係助詞「は」は論理的結び付きの流れを逆方向に働くことによってその部分を特に示し、かえって強くその部分を叙述あるいは述語と結びつける働きをする。主題は、叙述と鋭く対立することによって、主題たり得るのであり、したがって、本来徒によって、表されるべきものである。「は」は、その対立をさらにきわだたせる方向に働くことによって、それが他ならぬ主題であることを示すのである。格助詞などによって格関係が示されているということは、それが描き上げられることがらの中の一要素、叙述の一部分であることが示されているということであって、格関係の示されたものは、もはや、「それらについて語られるものごと」ではなく、「ついて語られることがらの一部分」になっているのである。したがって、連用成分であることが明示されたものに「は」がついても、それはとりたてにしかならず、主題とはなり得ないのである。
「係り結びの一側面」2p

又、主題を次のように定義づけ、

主題として提示するということは、話（叙述）をその範囲に限定する（日本文法大辞典668ページ）ということだ。前提を示すものだといってもよい。
「係り結びの一側面」3p

次のような主張をしている。

しかし真の主題は第一次のものに限られ、第二次以下は叙述部の中にある要素のとりたてと考える。
「係り結びの一側面」3p

このような考え方がなかったわけではないが、後に示すような分析の下での主張であることに注目したい。

佐治は最狭義の係助詞（「ぞ、なむ、や、か、こそ」）とハとの別、つまり、最狭義の係助詞は叙述内部で働く、ハ等にある主題を提示する機能を持たない。を「係り結びの一側面」において論証している。要点を抜き出しておこう。

最狭義の係り助詞が「は」と決定的に違う点は、「は」は存現文の主語を示すことができないが、最狭義の係助詞にはそれができるとい点である。もっとも、疑問としか表さない「や」「か」が、事実・現象の存在を直観的に認知し、それを言いたる存現文を作らないことは言うまでもない。16p
「は」は主題を提示する場合には、主題を言い切りの形を持った叙述と対立させることによって結びつけ、とりたてを示す場合には、その部分を述語と強く（排他的に）結びつける役割を果たす。22p
（引用者注、最狭義の係助詞は）それぞれ一種の文しか作らない—中略—。「は」はなぜ、平叙、疑問、命令、禁止、詠え、等々の叙述（述語）に対応し得るのか。それは「は」が主題を提示するのであるからこそ出来るのである。—中略—主題とは、—中略—解答を与えるべき問である。—中略—種々の答えが応じ得る無色のものでなければならない。23—26p

主題が無色のものであるとの指摘に特に留意したい。

佐治は、ハと最狭義の係助詞との別を論証するために、述語文節の担っている機能を、「あの方は、多分、きのう会場へ全然いらっしゃらなかったでしょうか。」を例文に挙げつつ次のように分析している。

- (1) 素材の意味（—略—）
- (2) 叙述内部の統叙（—略—）

- (3) 判断 ((1) (2) によってまとめ挙げられた叙述が完結させられる＝述語文節を構成する用言・助動詞の最後のものが言い切りの形をとる ((再展叙されない)) ことによって表現される、主題と叙述部の関係の認定 ((存現文にあっては存在の認定)) の表明。例文では「あの方は一分、きのう会場へ全然いらっしゃらなかったでしょう」)
- (4) 判定 (3) に対する話し手の確か・不確かな気持ちの表明。例文では「…でしょうか」)
- (5) 聞き手への働きかけ ((3) (4) とのかかわりを持ちながら、話し手の聞き手に対する要求、(a) 理解の要求＝平叙、(b) 言語による解答の要求＝疑問、(c) 行動の要求＝命令・依頼・勧誘・禁止などの表明。例文では、「…でしょうか」による疑問の表明。聞き手への働きかけを持たないものは (d) 詠嘆・感動の表現になる。なお、(5) はイントネーションと深く結びついている。)
- (6) 聞き手へのもちかけ。((4) (5) とのかかわりを持ちながら、文全体を話し手が聞き手に伝達する際の (a) たずねかけ・同意を求める気持、(b) おしつける気持、(c) つきはなす気持、などの表明。例文では「…でしょうかね」による「たずねかけ」。なお、(5) もイントネーションと深く結びついている。)
- (7) 待遇。(一略一) 「係り結びの一側面」 25～26 p

そして、最狭義の係助詞の機能を次のようなものであるとしている。

狭義の係助詞の機能は、＜(3) 判断＞、＜(6) もちかけ＞でなく、一般的には純終助詞によって担われている＜(4) 判定 (話し手の確か不確かな気持ちの表明)＞が中心で、それに伴って＜聞き手への働きかけ＞＜聞き手へのもちかけ＞が同時に表され、その判定によって＜判断＞にも関係をもたざるを得ないのである。 「係り結びの一側面」 27 p より

同様の指摘は、佐治も触れているように、すでに阪倉 (「歌物語の文章」) によってなされている。しかし、述語文節の他の機能との関連の中で位置付けている点で重要である。

さて、次にこれまでの研究者によってハに最も近い存在として扱われてきたモについて佐治の分析を見ることにしよう。

佐治のモについての分析は、「係り結びの一側面－主題 (部) ・述部に関連して－」に見ることが出来る。その中で、佐治は、モはハと違って、その統括する徒を、それについて解説、説明がなされるべき問題、つまり＜主題＞として提示する機能を持たず、叙述部の一部にすぎない、とし、係り受けという観点から次のように述べている。

「は」「も」共に＜係機能 (1) (引用者注、用言の陳述に勢力を及ぼし、一定の陳述を要求する機能のことをいう)＞は持っていないと判断する。 「係り結びの一側面」 8 p

では＜係機能 (2) (引用者注、言い切りの述語が来なければ治まらないような係り方のことをいう)＞を果す「は」(引用者注、非対比的徒についた場合のハ) はどこまで係っていくのかと言うと、それは平叙、疑問、命令等を表す述語によって受けとめられ得るのだから、＜(5) 働きかけ＞＜(6) 持ちかけ＞にたいしては無色だと考えられ、結局＜(4) 判定＞のところまでだと言えよう。 「係り結びの一側面」 10 p

徒に付いた「も」にも、＜(4) 判定＞にまで係っていく＜係機能 (3)＞は無いと言える。 「係り結びの一側面」 11 p

そして、ハとモの別を次のような表にまとめている。

上接語句	機能 助詞	格	準体	並列		副 係					
				準体	副	(1)	(2)	(1)	(2)	(3)	(4)
非対比的徒	は	×	×	×	×		○	×	○	○	○
対比的徒	は	×	×	×	×		○	×	×	△	×
上以外	は	×	×	×	×	○		×	×	△	×
徒	も	×	△	△	○		○	×	×	△	×
上以外	も	×	×	×	○	○		×	×	△	×

表中の副(1)、(2)、係(1)、(2)、(3)、(4)とは、各々、副機能(1)=主格を示す「が」「の」以外の格助詞の付いた成分や、副詞や、用言の連用形などの連用成分に付いて、それを限定して、下の用言、述語に続ける機能、副機能(2)=徒に付いて、用言・述語に係って行き、〈(3)判断〉まで係っていく機能で格機能でないもの。係機能(1)=用言の陳述に勢力を及ぼし、一定の陳述を要求する機能。係機能(2)=言い切りの述語が来なければ治まらないような係り方。係機能(3)=素材を統括しつつそれを場面に向かわせるような場面志向性を同時に表す機能。係機能(4)=他のものとの相対的關係において一つのを特に取り上げる機能・強調的指示の機能。を指している。又、表中の○、×、△は、各々、その機能のある場合、無い場合、不十分な場合を示す。
「現代語の助詞『も』」20pより

以上、提題論の流れを見てきたのであるが、引用したものの中においても、類似の指摘や考察があったように思う。引用しなかったものの中に多くの類似の言及が見られることは言を待たない。しかし、同様の指摘や分析であるようでありながら、視点が異なっていたり、又ある場合は詳細になり、ある場合には傍証が加わると言った具合に、相違が見られるのも、事実であろう。一々そのことには言及しなかったが、今後の議論において必要と思われる箇所は網羅出来たものと思う。

2 提題論の成果と問題点

主題提示のハに焦点を当てて、松下から佐治までの提題論の成果と問題点を挙げておくことにしよう。

(1) 明らかになってきたこと。

① ハは大きく二つに大別出来る。

主文の徒に位置するハとそれ以外に位置するハである。

前者は主題を（主要述部に対立して「～について」を表すもの）、後者は対比、強調等を表す。

② 主文の徒を受けるハは、主題を提示、文末言い切りまで勢力を持つ。文を越えて働くこともある。

③ ハは、主題提示機能を持つが、「モ」「ゾ、ナム、ヤ、カ」にはその機能は無い。

④ 主題提示のハは、言い切りの述語が来なければ治まらないような係り方である係機能(2)を持つ。そして、それは、(4)判定（話し手の確か、不確か of 気持ちの表明）まで係る。聞き手への働きかけやもちかけに対しては無色である。

モや他の係助詞には係機能(2)は無い。

⑤ 名詞+だ、や形容詞で終止する文であっても、有題文と言えないものがある。

- ⑥ 副題 (sub-topic) は、叙述部要素の取り立てにすぎない。
 - ⑦ 主題は旧概念を受けることが一般的である。
 - ⑧ 題述文の題目は、顕題、略題、転位陰題、状況陰題の別がある。
 - ⑨ その他
- (2) 問題点及び課題
- 問題点としては、次の三つを挙げておく。
- ① 文末形式・モダリティと有題、無題性の対応関係分析については必ずしも説得力のあるものとなっていない。
 - ② 状況陰題の題目の認定が分かりにくい。
 - ③ 既に多くの批判があるように、旧概念を主題が受けとるといい切ってよいのか。今後の課題は、次のように纏められよう。
- ① ハの主題提示及び取り立ての条件がかなり明らかになってきているが、多くの用例によるさらに細かな分析が要求されよう。これはシンタクス、意味、語用等の全般に渡って言えることである。

〈引 用 文 献〉

- 富士谷成章 1778 『あゆひ抄』(『富士谷成章全集上』所収)
- I・ロドリゲス 1604~1608 『Arte da Lingoa de lapam』(『ロドリゲス大日本文典』土井忠夫訳)
- 松下大三郎 1928 『改選標準日本文法』
- I・ロドリゲス 1930 『標準日本口語法』
- 佐久間 鼎 1940 『現代日本語法の研究』
- 佐久間 鼎 1959 『日本語の言語理論』
- 三尾 砂 1948 『国語文章論』
- 三上 章 1953 『現代語法序説』
- 三上 章 1958 「基本文型論」(『三上章論文集』所収)
- 三上 章 1959 『新訂版現代語法序説』(『統現代語法序説』)
- 三上 章 1960 『象は鼻が長い』
- 佐治圭三 1972 「題叙文と存現文」(『大阪外大学報』29)
- 佐治圭三 1974 「係り結びの一側面—主題(部)・述部に関連して—」(『国語国文』43-5)
- 佐治圭三 1975 「現代語の『も』—主題・叙述(部)、『は』に関連して(『女子大文学・国文編』26)